

たまのよこやま

目次

- 令和6年度 東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団 普及連携事業 公開セミナー報告
墓・ムラ・縄文人 — 縄文時代後期前葉の集落様相 — ……2
- 遺跡だより 府中市 武蔵台遺跡 ……4
- あの遺跡は現在!? 東京都立忍岡高等学校 台東区向柳原町遺跡 ……5
- **新展示紹介 土の中のトーキョー ～近代考古学事始～** ……8

後期前葉って
どんな時期?

今、近代の
遺跡がアツい!



トーキョーの礎と外国の技術

災禍を乗り越えて発展してきたトーキョー



近代化で変わったトーキョーの暮らし



遺跡の足跡
帝都発展の
足跡をたどる

令和
7年度
企画展示

土の中の トーキョー

開幕

～近代考古学事始～



墓・ムラ・縄文人 — 縄文時代後期前葉の集落様相 —

「東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業 公開セミナー」は、東京都埋蔵文化財センター・かながわ考古学財団・埼玉県埋蔵文化財調査事業団による連携事業として、平成20年度から毎年開催しています。各財団が行った発掘調査や研究の成果を広く皆様にお伝えするとともに、財団の業務や役割についても理解を深めていただくことを目的に行っており、今回で第17回目となります。

今回は公益財団法人かながわ考古学財団の主催で、「墓・ムラ・縄文人—縄文時代後期前葉の集落様相—」と題し、令和7年2月1日（土）に神奈川県横浜市の「県民共済みらいホール」にて開催しました。セミナーは、テーマの趣旨説明、三都県各財団からの基調報告、大工原 豊 先生（國學院大學栃木短期大学准教授）による記念講演、そしてミニシンポジウムという内容でした。

開催の趣旨



阿部 友寿氏

はじめに、阿部友寿氏（公益財団法人かながわ考古学財団）が趣旨説明をされました。一般的に縄文社会としてイメージされるのは、火焰土器に代表される装飾性豊かな土器や大規模な環状集落が特徴的な縄文時代中期と、土偶などの祭祀具を用い、水場遺構や環状盛土遺構をつくる縄文時代後晩期でしょう。この

2つの時期の転換期にあたるのが、今回のテーマである縄文時代後期前葉（以下、後期前葉）です。この時期の社会変化を明らかにするために、特に、墓域を伴う特定住居（「核家屋」）に注目して、地域性や変遷を比較することがこのセミナーの目的です。墓域を伴う特定住居とは（1）後期前葉に関東山地周辺に分布する、（2）墓域に入口を向けた住居で、（3）住居の前面が削平される等の土木工事を伴って住居が墓域を見下ろす高い位置に作られ、（4）多くの場合、長期間にわたって同じ場所に建て直し

続けられ（多重複）、（5）山地では住居前に列石、墓域に上部配石や配石墓がみられるというものです。今回は東京・神奈川・埼玉・そして記念講演にて群馬の様相を比較していきます。

基調報告1 神奈川県の様相



岩 佑哉氏

公益財団法人かながわ考古学財団の岩 佑哉氏が近年の調査成果を踏まえ、当該期の神奈川県域における居住域と墓域の立地、住居の多重複のあり方、配石遺構の様相を確認しました。その結果、県内のいずれの地域でも後期前葉から中葉にかけての集落は台地や丘陵

の斜面上に営まれること、居住域は斜面の高位につくられ、特定の住居は多重複すること、特定住居の前面にあたる斜面の低位に墓域がつけられること、県央部から西部では配石遺構も多くつくられるが、県東部ではほとんど認められないことが確認されました。石を用いた遺構の様相の地域差は、文化的な違いや石材の獲得しやすさの違いによるものと考えられます。そして累積する住居や墓は、かつての居住者や被葬者を直接または間接的に知っている人物により造営・管理されたことが示唆されます。

基調報告2 東京都の様相



山崎 太郎
調査研究員

当センターの山崎太郎調査研究員より都内の様相が報告され、東京湾岸の集落は中期末から後期後葉以降まで断続的に継続する一方で、丘陵・山岳地では後期前葉までに断絶する集落が多いこと、湾岸の集落では千葉県域に特徴的な廃屋墓が見られる一方で、関東山地に近い西側ほど配石墓など石を用いた遺構が多いことなど、東京都の東西で地域差が確認されました。また、後期初頭から前葉にかけて、河川跡に遺物集

中地点を持つ遺跡が多くあり、当該期には低地利用の意識が高まること、居住域の近くにつくられていた墓域が、後期中葉には居住域から離れていくことが確認され、時代を経て集落の在り方が変化していることが指摘されました。

基調報告3 埼玉県の様相



加藤 隆則氏

公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の加藤隆則氏かとうたかのりにより埼玉県域の様相が報告されました。県西部の山間地では住居や墓への礫の多用が認められ、関東西部山間地の影響が強く見受けられます。一方で、県東部の

当時の海浜部では住居域に墓をつくるなどの点が東京湾東岸地域の様相と似ています。そして中間にあたる内陸部では、特定住居の前面に墓域を形成する神奈川の要素の濃い集落だけでなく、墓を累代的に引き継いだ山間地の様相に類似した集落もあり複雑な様相を呈します。これを墓の形状と埋葬時の遺体の姿勢から見てみると、西部山間地と東部海浜部から新たに伸展葬が席卷し、中間地帯で受容されていく様相が現れてきます。また、後期中葉以降にも継続する集落に注目すると、斜面ではなく谷頭に占地しているなど、低地資源の利用が盛んになっていたことが推測されます。

記念講演



大工原 豊先生

國學院大學栃木短期大学の大工原豊先生により「群馬地域における後期集落と配石墓の展開」という題で記念講演が行われました。「核家屋」集落の配石遺構は祭儀礼行為を行う場と考えられます。そして「核家屋」以外の

住居が同時期に併存する例から、集落内には儀礼を行う集落の「長」を頂点とした階層構造が想定されます。さらに、「核家屋」を伴わない一般集落が「核家屋」集落の周りに散在することから、「核家屋」集落は地域集団の「長」が居住する集落でもあったとも考えら

れます。ここから、後期前葉の「核家屋」集落の出現は地域社会の階層化の進展を端的に示す現象であると推定され、墓制の斉一性は強い地域連帯があったことも示唆しています。しかし後期中葉以降は配石墓群の構造が遺跡ごとに大きく異なることから、集落ごとに生業の専門化が進行したと考えられます。

ミニシンポジウム

【1】集落の立地の時期的変遷

中期には台地上で集村形態→後期初頭に激減→後期前葉に台地縁辺の谷に面して住居増加→後期後半に一部を除いて集落が継続しない、という集落の断絶の有り方が、四都県で共通していることが確かめられました。

【2】後期以降に水場や低地の利用が盛んになることと集落の状況との関係

神奈川と群馬では水場遺構の事例が少ないものの、集落が台地から低地に移っていくという傾向が四都県で共通していることが確かめられました。

【3】後期前葉の大規模な土地改変の状況

大規模な土地改変の事例は後期前葉の関東西部にみられ、後期後半以降に東京などでも大形配石が、埼玉などの平野部で環状盛土遺構がみられることが確認されました。そして、転換期にあたるこの時期の社会復元には、周辺地域との比較や石器分析などを含めた総合的な研究の進展が課題として挙げられました。最後に、会場の石坂茂いしざか しげる氏から群馬と神奈川の特定住居の状況の違いについてコメントがなされました。

定員を大きく上回る応募の集まった本セミナーは、盛況のうちに幕を閉じました。後期前葉という時期についての理解を深める一助としていただけましたならば幸いです。(宮本 由子)



ミニシンポジウムの様子

府中市 武蔵台遺跡

所在地：府中市武蔵台2丁目
 調査期間：2022年12月～
 調査面積：約12,000㎡

武蔵台遺跡（府中市遺跡 No.5）は、府中市武蔵台二丁目に所在します。この遺跡は、武蔵野台地南西部の国分寺崖線に面する武蔵野面上に位置し、標高は約80mを測ります。これまで都立府中病院内遺跡調査会や東京都埋蔵文化財センターなどによる数次の発掘調査が実施され、旧石器時代をはじめ、縄文時代や古代の遺構・遺物が数多く検出されてきました。また、本遺跡の周囲は武蔵国分寺跡関連遺跡に囲まれており、東に武蔵台東遺跡、多喜窪遺跡、南東に武蔵国分寺・国分尼寺跡、西に多摩蘭坂遺跡などが分布します。

東京都埋蔵文化財センターが武蔵台遺跡の発掘調査を行うのは今回で5回目です。遺跡範囲の北西部から中央部にかけての約12,000㎡を対象に発掘調査を実施しており、2025年1月現在までに旧石器時代、縄文時代、古代の遺構や遺物を確認しています（写真1）。旧石器時代については、立川ロームV層中からナイフ形石器が1点出土しました。縄文時代の遺構は陥し穴1基、土坑16基、集石1基、ピット110基などが確認され、遺物は前期から中期の土器片や石鏃・打製石斧などの石器類が出土しています。古代の遺構は竪穴建物跡15軒、掘立柱建物跡2棟、溝2条、土坑36基、ピット96基などが検出されています。遺物は土師器、須恵器、瓦が数多く出土しているほか、緑釉陶器や灰釉陶器の破片、石製紡錘車、刀子や足金物といった鉄製品なども出土しています。竪穴建物跡から出土した土師器や須恵器は、8世紀後葉から10世紀中葉のものまで幅がありますが、集落の形成時期は平安時代が中心と見られます。

今回は、今年度の調査で見つかった遺構の中から、A100-SI47という平安時代の竪穴建物跡を紹介합니다。調査区南東側で検出されたこの建物跡は、南東隅が現代の建物基礎によって壊されていますが、東西約4.2m×南北約3.2mの長方形を呈していたと推測され、東壁中央にカマドを備えます（写真2）。カマドからは多数の平瓦や丸瓦が出土しており、カマド内側に沿って立て掛けてある様子が確認できたため、カマドの構築材として瓦を使っていたと見られます（写真3）。こうしたつくりのカマドは、武蔵国分寺跡周辺の遺跡で見つかっており、国分寺の瓦

を転用した可能性が考えられます。また、床面直上からは焼けて赤く変色した土が大量に出土したことから、いわゆる焼失家屋と思われます。注目すべきは、焼土が床面中央からほとんど見つからず、壁際に集中していたことです。もしかすると土壁のような壁材が、火災によって焼け落ちたのかもしれませんが。一方、生活時に使っていたであろう土器はあまり残っていなかったため、建物内をある程度片づけた上で意図的に火をかけた可能性が考えられます。

次年度も調査を継続する予定ですので、今後さらに旧石器時代、縄文時代、古代の遺構と遺物の分布が明らかになっていくと思われます。（間 直一郎）



写真1 古代の遺構確認面と周辺の様子（東から）



写真2 A100-SI47 焼土検出状況（西から）



写真3 カマド構築材（瓦）出土状況（南西から）

いま あの遺跡は現在！？ Vol.24

— 東京都立忍岡高等学校 台東区向柳原町遺跡 —

このコーナーでは発掘調査時と現在の写真を比べながら、調査後の遺跡がどのように変わったのかをご紹介します。

JR 浅草橋駅西口から北へ徒歩5分余り、今回紹介する「向柳原町遺跡」は都立忍岡高等学校の校舎改築・改修に伴い発掘調査が行われました。

この周辺は江戸時代に平戸藩松浦家の上屋敷のあった場所で、調査範囲は屋敷内の庭園跡地にあたりま^す。この庭園は小堀遠州が大徳寺住持僧の江月と諮り作庭した「向東庵」が起源とされ、幾度かの改修を経て1834年（天保5年）に「蓬莱園」と命名されました。屋敷の北に面した、不忍池を水源とする鳥越川（三味線堀）から水を取り入れた回遊式庭園は、約2,500坪余りの広さで、池を中心に築山、東屋、燈籠十数基が配されていたとされます。発掘調査では、「蓬莱園」内にあった池を中心に、護岸に付属する櫓の基礎と考えられる石組基礎や、飛石、浮石、舟付場、池の導水部などの庭園に係わる各種の遺構が見つかっています。「蓬莱園」の各

施設には園中三十六景として『望潮の入江』（導水部）や、『岩間の迫門』（池北東の流れ）、『あやおる岸』（舟付場周辺の護岸）などの雅名が付けられており、作庭にあたってのこだわりが窺えます。発掘調査でも上面が丁寧に研磨して水面の光と調和するような加工を施された飛石・浮石や、護岸前面に設けられた州浜などが見付き、作庭への熱意が読み取れます。

「蓬莱園」は明治維新以降もこの地に残りましたが、大正12年の関東大震災で大きな被害を受けて荒廃し、昭和初期に池も埋め立てられてしまいました。現在は高校の南側にある「柳北公園」に石碑と案内板、高校の敷地内に蓬莱園の大イチョウと池の一部が遺されるのみとなっています。（武内 啓）

◆調査成果が掲載された報告書

2005『台東区向柳原町遺跡』東京都埋蔵文化財センター調査報告書 第169集 東京都埋蔵文化財センター
※写真1・2は上記報告書より引用



写真1



写真2

写真1 池の護岸際で見つかった櫓の基礎跡。櫓の上から庭園を眺めていたのでしょうか。

写真2 発掘調査によって見つかった『あやおる岸』の護岸と舟付の杭痕。



写真3



写真4

写真3 現在も残る蓬莱園の大イチョウ。高校の正門からその姿を見ることが出来ます。

写真4 「柳北公園」北西隅に設けられた石碑と、蓬莱園の歴史を伝える案内板。

“なんで!?” アイデア紹介!



こんにちは! ボクはナンデくん!
先日終了した令和6年度企画展示では
「多摩の“なんで!?” な出土品」の案内役を
務めていたよ。
このコーナーではみんなから集まった
“なんで!?” のアイデアを紹介するよ!
今回で最終回だよ。

ナンデくん

多摩丘陵出身。約 5,000 年間土の下で眠っている間に、縄文時代の
ことも、自分がなんでバンザイしているのかも忘れちゃった!
このコーナーでみんなに一年間 “なんで!?” を投げかけて来たよ。
令和7年度の新しい企画展示もよろしくね!

◆自力で立たないのはなんで!?

尖底土器の使い方

底が尖った尖底土器(写真1)の使い方を、何人かイラスト入りでアイデアをくれたので、少し思い出してきたよ。僕の遠いご先祖様が暮らした縄文時代早期(11,500~7,000年前頃)には、住居の中に火を焚く炉がないことが多かったんだ。その代わりに、住居の近くに炉穴というのが見つかることが多いよ。多くは長い楕円形の窪みとして発見されるけど、残りの良い例も見つかっているよ(写真2)。



写真1 尖底土器

土器と焚き火を想定で書き加えると、アイデア1のイラストとそっくりだよ。炉穴の使われ方はいろいろな説があって定まらないけど、アイデア1のように煮炊きに

使ったのは有力な説の一つだよ。これなら土器の底が尖っていても問題なさそうだね。

使ったのは有力な説の一つだよ。これなら土器の底が尖っていても問題なさそうだね。

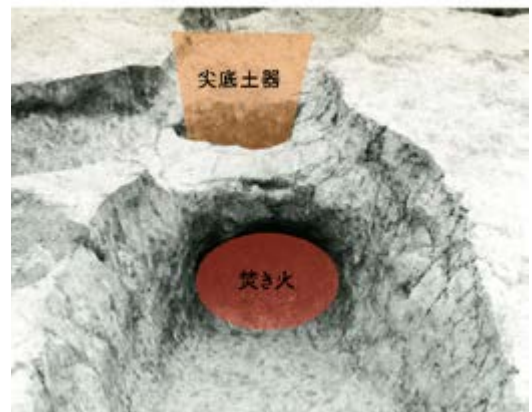


写真2 炉穴(新羽第11遺跡)

『古代のよこはま』横浜市教育委員会 1986 に加筆

◆なんでか、似てるけど。

"Great minds think alike"

このコーナーの土器(写真3)を見たタイの方からアイデアをもらったよ。

訳すと「国籍・年齢・世代を問わず、人は自分にとって最も効率的な事をしたいと思うと考えます。賢者たちは同じように考える、ということわざがあるのはそのためなのかもしれません。」だって。

そういうことわざがあるんだね。「考えることが一緒だね!」って感じかな。他の国にもこんな形の土器があったらボクに教えてね。



アイデア1

I think people regardless of nationalities, age or generation would like to do things that are most efficient to them! Maybe that is why there is a saying, "Great minds think alike!"
 → LOVE FROM THAILAND ♡

アイデア2



写真3 把手付きの土器と現代のビアジョッキ

◆いきものを表現するのはなんで!?

トーテム的なやつ?

トーテム的なの? 御守りみたいな感じ?

アイデア3

土器の把手などに表現されるいきものたち。お守りとか、神様っていうアイデアはいくつかもらったけど「トーテム」っていうアイデアは初めてかな。

学術的な難しい言葉だけど、簡単に言うと、遠いご先祖様を表すシンボルだって聞いたことがあるよ。動物や植物をデザインしているらしいね。へびに見える把手(写真4)があるから、「遠いご先祖様がへびだった」と信じている人が作ったのかな? 他にはイノシシをデザインする例(写真5)も多から「イノシシがご先祖様」と信じる人が多かった



写真4 把手(へび?) 写真5 把手(イノシシ?)

のかな。でも、時期や地域に偏りも見られるみたいだよ。だとしたら、単純にご先祖様が同じだから同じデザインの把手を作った、と考えるのは無理があるかもしれないね。

もし、トーテムを意識して把手や土器の文様をデザインしたのなら、ボクはどんな生き物をご先祖様と考える人に作られたのかな?

◆その他の感想

むかしの人は今より・・・

むかしの人は今より
 もっともっとすこいんだな
 と思いました。

アイデア4

「こんなに大きさが違うのはなんで!？」のコーナーで石器(写真6・7)を見て感想を書いてくれたみたいだね。



写真6 打製石斧

写真7 磨製石斧

指先サイズの石器も上手に作っていて、確かにすごいよね。石器にしても土器にしても、ボクもいきなりは上手に作れなかったよ。でも、お父さんお母さんに教えてもらいながら徐々に上手くなっていったんだ。一人では作れない竪穴住居等の大きなものはムラの人と協力してね。

現代も、沢山の人が学んで知恵を出し合って暮らしているよね。自動車だったり病気を治す薬のような難しいものを作ったりしているのがいい例だよ。みんなも知恵を出し合い、協力して暮らしやすい世の中を作って欲しいな。

企画展示が終わったので、ボクは特別収蔵庫に移動したよ。ボクに会いたくなったら、またセンターに遊びに来てね。(ナンデくん/訳:宗像 義輝)

土の中のトーキョー ～近代考古学事始～

見逃ス
勿し!

今回の企画展示は「土の中のトーキョー～近代考古学事始～」と題し、東京都内で発掘調査された近代の遺跡について取り上げます。

今年は終戦から80年、また昭和元年から数えて丁度100年の節目の年になります。近年、埋蔵文化財の世界でも、“近代”を扱うことがにわかに増えてきました。当センターも、既に多くの近代遺跡調査の実績があります。なぜなら、都心部で実施してきた江戸遺跡の対象地は、明治政府が接收した武家地であることが多く、近世と共に近代の重要遺構もしばしば姿を現したからです。

今回のテーマを聞いて、「考古学で近代？掘らなくても判るんじゃない?」、「文書、写真や映像だけでなく、当時のモノもたくさん残っているよね?」など、疑問を抱かれた方も多いかもかもしれません。確かに、考古学は無文字時代の歴史・文化解明に対する唯一の手段として発達してきました。しかし、古代～近世など記録の残る時代であっても、考古学が大きな力を発揮することは既に証明されています。それは、近代であっても同様です。なにより、地下に残された物証には文字や映像に比する力があることを、今回の展示で、是非ご紹介したいと思っています。

前置きが少々長くなりましたが、今回の展示について簡単にご案内しましょう。展示は、トーキョーの近代化の様々な側面について、3つのテーマを設けて取り上げます。

1. 「トーキョーの礎」

多くの人々が暮らしていくためには、都市としての生活基盤の整備が欠かせません。人や物資を運ぶ“交通”、生活に必須な“水”、新たな街並



初期の水道鉄管
(ベルギー製)
(東京都教育委員会所蔵)

みを造った“煉瓦”^{れんが}など、新たな街“トーキョー”の近代化を象徴する様々なインフラについて、その資料に着目して紹介します。

2. 「トーキョーを襲った災禍」

首都として成長を続けたトーキョーの街。しかし、その過程は決して順風満帆だったという訳ではありませんでした。発掘調査によって土の中から現れた、震災や戦争による空襲など様々な災禍の痕跡は、現在の私たちに多くの教訓を伝えています。



焼夷弾と親爆弾の錘
(豊島区教育委員会所蔵)

3. 「トーキョーの暮らし」

トーキョーの街には様々な人々が集い、暮らしていました。こうした環境の中、人々はこれまでの伝統にそれぞれの技術や文化を融合させながら、新たな生活文化を開花させていきました。日々の営みの道具をいくつかの小テーマに分けて紹介します。



宮家の人々の食器
(東京都教育委員会所蔵)

開催期間は令和8年3月8日(日)までの約1年間です。この間、展示に合わせた解説会や講演会も実施します。私たちに最も身近に思えて、実は意外と知らない(?)近代のトーキョーについて、新たな発見のお手伝いができれば幸いです。(武内 啓)

いざ会いに行かう
若き日のトーキョー!



※今号の表紙：左から鉄道レールとチェアー(東京都教育委員会所蔵)、城北空襲被災資料(豊島区教育委員会所蔵)、国産ティーカップ(東京都教育委員会所蔵)



たまのよこやま 140
東京都埋蔵文化財センター

2025年3月21日発行

〒206-0033 多摩市落合1-14-2 TEL 042-373-5296 <https://www.tomaibun.jp/>

